

私の貞操観

与謝野晶子

青空文庫

従来は貞操という事を感情ばかりで取扱つていた。「女子がなぜに貞操を尊重するか。」
 こういう疑問を起さねばならぬほど、昔の女は自己の全生活について細緻さいちな反省を下すこ
 とを欠いていた。女という者は昔から定められたそういう習慣の下に盲動しておればそれ
 で十分であると諦あきらめていた。

けれども今後の女はそうは行かない。感情ばかりで物事を取扱う時代ではなくなった。
 総すべてに対して「なぜに」と反省し、理智の批判を経て科学的の合理を見出し、自己の思索
 に繋かけた後でなければ承認しないという事になつて行くであらう。

感情をあながちに斥しりぞけるのではない。女が唯一の頼みとしていた感情は、いわば原始的
 の偏狭へんきやうと、歴史的の盲動とで海綿状に乱れた物であつた。その偏狭は時に可憐だとし
 て小鳥の如くに男子から愛せられる原因とはなつたが、大抵はその盲動と共に女子と小人
 とは養いがたしとて男子から蔑視べっしせられる所以ゆゑんであつた。今は女の目の開く世紀である。
 その感情を偏狭より脱して深大豊富にすると同時に、その盲動を改めるために、それに軸
 または中心となる理智を備え、理智に整理せられつつ放射状に秩序ある感情の明動をしよ
 うとする時が来た。いわゆる女子の自覚とはこれを基礎として出発し、自己を卑屈より高

明に、柔順より活動に、奴隷より個人に解放するのが目的である。

男子はこういう意味の感情の修練、自己の解放を古くから氣附いていた。希臘^{ギリシャ}印度の古い哲学より歐洲近世の科学に到るまで、総て要するに男子が自ら全^{まった}かろうとする努力の表現である。女子は殆ど^{ほとん}これらの文明に与^{あずか}つていなかったといつてよい。

初^{うぶ}心な女だといわれることは最早何の名譽でも誇りでもない。それは元始的な感情の域に彷徨^{ほうこう}して進歩のない女という意味である。低能な女という意味である。

氣が附いて見ると、男子は大股^{おおまた}に濶^{ひろ}い文明の第一街を歩いている。哀れる女よ、男と対等に歩もうとするには余^{あま}りに遅れている。我我は早くこの徑^{こみち}より離れて追^{すが}い縋^{すが}りたい。総てに無自覺であつた従來の女に貞操の合理的根柢を考えた者のないのは当然であるとして、あれだけ女子の貞操を厳しくいう我國の男子に、今日までまだ貞操を守らねばならぬ理由を説明した人のないのは不思議である。

貞操の起原についてもまた我らは何の教えられる所もなかった。

自分の乏しい智識で考えて見ると、元始的人間に貞操というような觀念を自然に備えていたとは想像することが出来ない。古代に溯^{さかのぼ}つて見ればいずれの国民も一婦多夫であり、また一夫多妻であつた。また家長族長としての權利を男よりも女の方が多数に所有してい

た。今でも西蔵チベットその他の未開国には一婦多夫と女の家長権とが古代の倂おもかげのこを遺している。文明国においても娼婦しょうふや妓女ぎじょのたぐいは一種の公認せられた一婦多夫である。一夫多妻に到つてはいずれの文明国にも男子の裏面に誰も認める如く現に保存されている。

男子の本能の自躍するままに女子を選んだ元始的時代にあつては、後世の男子が我儘わがままに玩弄物がんろうぶつの如く女子を選ぶよりも、更に数層はなはだ甚しい強圧即ち暴力を以て女子を掠奪りやくだつしたのであるから、当時の女子に純潔じゆんけつを持することの出来なかつた事は想像が附く。

その当時の男女は食物を集める事と、舞踏し歌う事とに日を送つたが、男子は特に女子を奪うことに由つて敵の男子と戦わねばならなかつた。勿論当時の人間には国籍も住所も定つていない。水草を追うて浮動する小部隊が錯落さくらくとして散在した事であろう。今日謂う所の如き「家」とか「社会」とかいふ觀念のなかつたのは勿論である。

男子が他の男子と女の愛を競争し、一旦我手に掠奪した女を独占しようとするのは自然の性情である。其処に激烈な嫉妬が起つたに違いない。あるいは嫉妬は本来男子のものであつて、それが女子の性情となつたのは後世の事でないかとさえ思われる。

女子に自ら純潔を持することの出来なかつた時代に貞操の觀念が女子に自発しようとは思われぬ。唯だ女子の持つていたものは甲の男子を愛して乙の男子を厭いとうという自然の好

悪に過ぎなかつたであろう。好悪の感情はあつてもその選択の権利が女子になかつた時代であるから、好悪は一の感情として存在するだけで、それを死守する意力即ち貞操と名づけるまでの観念は成立たない訳である。

これに反して男子には、嫉妬と共に女子を自己一人に服従せしめようとする思想、即ち貞操を女子に強いるという事が生じたに違いない。自分は如かくのこと此く直覺する。貞操の起原は男子の威圧からである。女子にあつては本来被動的うけみのものである。

男子が一人で同時に幾人の女を独占することは丁度今もその遺風を伝えている土耳其トルコ帝の如きものであつた。一夫多妻は最も元始的なものである。一夫多妻となれば多妻の間に嫉妬の生ずるのは当然である。女子も遅れて嫉妬を感じるに到つた。

しかし浮動していた人間が土着する人間となり、「種族的階級」及び「家」という物を生ずるに到つて、男女の關係は政治的經濟的の關係と共に顛倒てんとうしたらしい。この時代において男子は女の家に行つて婚を求め、結婚した後も男子は女の家に通うのみで別に一家を創はじめて共棲きようせいすることはなかつた。女の家に入贅いりむことなることもなかつた。生れた子は女の家で育てる。女は子女に対して母權と併せて家長權を持っていた。男は夫としての權利も父としての權利も妻及び子女に対して取ることが出来なかつた。「ちち」（乳）

という語が古代においては父を意味せずに母の称であつた。

女が家長であるのみならず、引いて族長の権利を握るものも少くなかつた。多くの女じよし酋ゆうは現に『古事記』の神代史に倂おもかけを遺している。

土着した古代人は戦鬪と農耕と漁獵と商估しょうことを同一人で兼ねていた。まだ分業は起らなかつた。後世の如く體質の軟化しなかつた女子は男子と共にそれらの事に従つた。女兵はまた神代史に倂を遺している。

母を唯一の親として尊敬する所から総ての女の尊敬せられる風が生じ、また一面に純潔を好む神道の如き宗教上の儀式に処女を神巫かんなぎとして奉祀ほうしする習慣が出来てから、女子を尊敬することは一通りでなくなつた。これは前代の男尊女卑の反動とも見られる。

前代においては甲の男に掠奪せられ、また乙丙丁の男に掠奪せられて多くの異父の子女を育てた。女がこの時代には、「家」という城壁に拠よつて男子に對抗することが出来るようになり、男子の我儘な掠奪を免れることを得たのみならず、反対に男子をして愛情のために歡心を女子に求めしむるに到つた。女が男子を選択する位置に就ついた。上古の歌は概おおむね男子がその切せつない心を女に伝うる機関であつた。

女が心を許した一人の男子を守ろうとしても、男の心は一時その女に傾くのみで、時が

経てば変化して新しい女を好んで遠^{とわざ}かつて行き、入り代つて他の男が女の心を得ようと努める。男が多妻であると同時に女もまた勢い多夫とならざるを得ないのである。

従つて女は依然として異父の子女を一家の中で育てていた。

しかし家があれば家長として子女を養う家産を尊重せねばならぬ事を感じるに至り、女は経済上の事情から多くの子女を挙げる事を避けたに違いない。また父を異にした子女の間に感情の齟齬^{そご}が多くて一家の平和を破る事にも気が附いたに違いない。

また一方に種族の階級が隔たるほど、女が劣等な男子を簪^{ちん}にすることは恥^{ちじ}辱^{よく}である。

自然男子を選択する風が行われて、前代の如く男子の我儘に従つて離婚することが少くなつて行つたに違いない。

以上、宗教上に処女の純潔を尊ぶ習慣と、家庭の経済その他の事情と、階級的の自重と、この三つの理由から初めて女子が自動的に多くの男子と接することを嫌う思想、即ち貞操の萌芽^{ほうが}ともいうものを生じたのであらうと思われる。

更に次の時代に入つては前代の反動と社会的事情とからして、男女の位地を再び復古の状態に到らしめた。即ち種族との競争の激甚となるに従つて、戦士たる男子は時代の優者である。女子は殖産と小児の養育とのために忙殺^{いにしえ}せられて、最早古の如く男子と協力して

戦闘に従事することは不可能であつた。

また経済上の事情から多くの家族を同一の家に養うことが出来なくなり、新婚の男女は双方の親から譲られた資産を持寄つて別に一家を建て、初めて夫婦共棲の制度を生ずるに到つた。これと同時に戦士として時代の優者である男子が女に代つて家長となり、父権が母権に代つて子女を支配するに到つたのは自然の勢である。

父権が重んぜられかつ階級が益々尊ばれるようになって、初めて父系の血統を神聖視する思想を生じた。女を独占しようとする男子は更に血統を乱すまいとする思想と相待つて女子の貞操を一層きびしく要求する事となつた。

しかし貞操とは女子だけの道徳であつて、男子は毫も自己の貞操を反省しないのみならず、依然として一夫多妻が行われ、屋外に数人の妻を持つのみならず、同一の家に二人以上十数人の妻を貯うる者も少くなかつた。女子の権力は再び地に落ち、体のよい男子の奴隷となつた。父の血統を重んずる所から、「女の腹は借り物」と蔑視せられ、「子なき女は去る」といつて遺棄する事を何とも思わなかつた。

女子は折角芽を出し初めた自動的貞操を蹂躪せられて、再び元始的の外圧的貞操に盲従した。何の理由とも知らず、唯そういう運命の者だという迷信に諦めを附けて日を

送る女が世の中から貞女だと称讃される事となった。

男は自分の都合の好いように女を奴隷の位地に置いて対等に人格を研くことを許さなかった。愚に育てられた女は貞女の名を得て満足し、かくして今日に到った。

教育に由てにもかくにも理智の目の開きかけた今日の婦人が従来の外圧的貞操に懷疑を挟み、貞操の基礎をあらゆる思想の方面と各自の実証とに求めねば満足が出来なくなつて来たのはそれだけ文明人の心掛に接近したのである。女子の進歩である。

この問題は個人個人の問題であつて一般婦人を共通に支配し得る客観的基礎というものが容易に見えられようとは思われない。当分は各自の持っている智識と感情とに由つて研究した結果、独得の見解を下してそれを実行するより外はないようである。

体質の優劣と、境遇の良否と、教育の深淺とで各自の心状態が違う以上、またその心状態の違うということを今日の婦人が意識している以上、客観的な概論に屈従して各自の貞操観を完成する事は出来ない、客観的に学問的基礎を与える事も勿論自分らの内心が要求しているけれど、更にその中心に根強い個人自身の実証を据えるのでなければ満足しがたい。

次に少しばかり自分が貞操を尊重している現下の心持を述べてみたい。自分はこれを他に強いようにするのも、他に誇ろうとするのでも毛頭ない。所信を述べてこの問題を討究する資料に供したいばかりである。

先ず「貞操」という言葉の意味について自分の考を述べると、これには処女としての貞操と、妻としての貞操と二つの区別があるように思われる。昔は他の男を見て心を動かすものは既に姦淫かんいんしたのと同じだという考え方もあつたが、自分は一概にそうは思わない。或時期に達した処女が異性を見て好悪こうおの情を動かし、進んでは恋愛の感情にまで込入こみいるのは、食事や睡眠の欲望と共に自然の要求であつて、欲望がそれにのみ偏しない限りそれ是不正だといつて押え附ける理由は一つもない。恋愛は全く自由である。そういう好悪の情や恋愛が自生するので、それに催されて処女が一生の協同生活の伴侶である良人おとこを選択する鋭敏なまた慎重な心の眼も開いて行く。但し如何に恋愛関係が成熟していても、終生の協同を目的とする結婚関係に由らずして自己の肉体を男子に許すことをしないのが処女の貞操である。処女の貞操が専ら肉体的であるのと異つて、結婚後の婦人すなわ即ち妻としての貞操は良人以外に精神的にも肉体的にも他の男子と相愛の関係を生じないことを意味するのである。

自分がこの稿に筆を附けようとした初^{はじめ}に今更の如く気が附いたのは、從來自分が自身の貞操という事について全く無関心でいたことである。自分は生れて唯一度一人の男と恋をして、その男と結婚して現に共棲している事を当然の事だとして、幸福をこそ感^{かん}ずれ、少しもそれについて不安をも懷疑をも挟^{さしはさ}んだ事がない。一般の女子及び男子の貞操に關して考えた事はあつても自分の貞操は家常茶飯^{かじようざはん}の事のように思つていた。自分の貞操を軽く見ていたのかというと、軽いも重いもない。てんがそういうことは意識せずに過ぎて来た。そういうことを問題として輕重を考えて見る必要のない感情生活を續けて来たのであつた。処女時代にも結婚後にも不貞の欲望を起さず不貞の行為を敢^{あえ}てしなかつたという事が最も貞操を実行したのだとするなら、自分は自然に貞操を実行している女だと言つてよい。

健康な人がその方の専門家でない限り特に病理を研究しないように、貞操を破ろうとするような内心の要求のなかつた自分は、久しい間自分の貞操について顧慮する必要が全くなかつた。必^{ひつじよう}定^{じよう}今後もその必要があるまい。しかし自分の貞操観とでもいうものを述べようとすれば自分の經驗を基礎として筆を進めるより外はない。そこで今日まで何故^{なぜ}に自分の貞操が自然に守られて来たかと考えて見ると、初めていろいろの理由のある事に気が附く。

自分には「純潔」を貴ぶ性情がある。鄙^{ひきん}近に言えば潔癖、突込んで言えばこれが正しい事を好む心と連関している。この性情が自分の貞操を正しく持^じずすることの最も大きな理由になつてゐるように考えられる。唯^ただ貞操の上ばかりでなく、自分の今日までの一切はこの性情が中心になつて常に支配してゐるようになつてゐる。自分の郷里は歴史と自然とこそ美しい所に富んでいても、人情風俗は随分墮落した旧^{ふる}い市街であり、自分の生れたのは無教育な雇人の多い町家である。従つて幼い時から自分の耳や目に入る事柄には如何^{いか}わしい事が尠^{すくな}くなかつた。自分が七、八歳の頃から自分だけは異つた世界の人のような氣がして周囲の不潔な事柄を嫌い表面^{うわべ}ではともかく、内心では常に外の正しい清浄な道を行こうとしていたのは、厳正な祖母や読書の好きな父の感化にも因るとはいえ、この「純潔」を貴ぶ性情からである。

自分は十一、二歳から歴史と文学書とが好きで、家の人に隠して読み耽^{ふけ}つたが、天照^{あまてら}大御神^{すおおみかみ}の如き処女天皇の清らかな氣高^{けだか}い御一生^{うらやま}が羨^{うらやま}しかつた。伊勢^{いせ}の齋^{さい}宮^{いぐう}加茂^{かも}の齋院^{さいえん}の御上^{おんうへ}などもなつかしかつた。自分の当時の心持を今から思うと、穢^{きたな}い現実に面してゐながら飛び離れて美的に理想的に自分の前途を考え、一生を天使のような無垢^{むく}な処女で送りたいと思つていたのであつた。

また自分の心持には早くから大人びている所があつた。投げやりな父に代り病身な母を助けて店の事を殆ど一人で切盛きりもりしたためもあるが、歴史や文学書に親したんだので早く人情を解し、忙せわしく暮す中にも幾分それを見下して掛かる余裕が心に生じていたからであつたらしい。

それで大人びていた自分は、恋愛などの心持も文学書に由つて十二歳の頃から想像することが出来た。『源氏物語』の女の幾人に自分を比較して微笑ほほえんでいた事もあつた。しかし異性に対する好悪の情はあつたにせよ実際に自分自身の恋愛と名づくべき感情は二十三の歳まで知る機縁が自分の上になかつた。常に自分の周囲の男女は都て不潔な人間だという気がして、それで書物の中の男女にばかり親んでいた。

一般に処女の恋愛は異性に対する好悪の情が好奇心に一步を進めた所から生ずるといふ人がある。しかし自分には何らのそういう好奇心も感じなかつた。自分の経験でいえば、性欲といふべきものの意識は処女時代でない。性欲の記事を読んでも、男子のように肉体的に刺激せられる所は少しもない。これは男子と生理関係の相違が大変にあるらしい。或る特別な境遇に育つた処女は知らぬこと、普通の処女は自分と同じであらうと思われる。専門学者から見たなら、処女の恋愛や男子に対する好き嫌いの感情にもその根柢には性欲

が潜在しているかも知れぬが、処女には全くその意識が欠けているのではないか。もし処女にもあれば、性欲に対する好奇心があるだけであろう。それとても目に見えて肉体の衝動から自発するのではなからうと想われる。そうして自分にはその好奇心に類似するものすら欠けていた。

自分が「純潔」を貴ぶ所から堺^{さかい}の街^{まち}の男女の風俗のふしだらな事を見聞きしてそれを厭^{いと}い、また読書を好む所から文学書の中の客観的な恋愛に憧^{あこが}れて、自分の感情を満足させていたのが、処女時代の貞操を守り得た二つの理由であったが、厳格な家庭が実世間の男子と交際する機会を与えなかったのもまた一つの理由であった。

自分は学校へ行く以外に家の閥^{しきい}を跨^{また}いだことは物心を覚えて以来良人の許^{もと}へ来るまでの間に幾回しかないということの数えられるほど稀^{まれ}であった。堺^{さかい}の大^{おお}浜^{はま}へさえ三年に一度位しか行かなかった。自分の歌に畿内^{きない}の景色や人事を歌うことが多くても、実際京都や大阪へ行つたことは十度にも満たないのであった。それだけにかえって深い印象が今に残っているのかも知れぬ。勿論学校へ行くには女中や雇人の男衆が送り迎えをする。その他の場合は父や親戚^{しんせき}の老人や雇人の婆^{ばあ}やなどが伴^つれて行つてくれる。全く単独に出歩いたことはなかった。

女学校を出てからは益々家の中でばかり働いていた。厳し過ぎる父母は屋根の上の火の見台へ出ることも許さなかった。父母は娘が男の目に触れると男から墮落させに来るものだ^{はなはだ}と信じ切っていた。甚しい事には自分の寝室に毎夜両親が嚴重な錠を下して置くのであった。雇人の多い家では——殊に風儀の悪い堺の街では——娘を厳しく取締る必要があることは言うまでもないが、自分ほど我身を大切に守ることを心得ている女をそれほどまでにせずともよいであろうに、自分の心持を領解してくれない両親の態度をあさましいと思つて、心の内で泣いたことも多かった。

自分は生^{うまれつき}来^{そとで}外出を好まなかった所へ父母が其様^{そんな}であるから、少しは意地にもなつて、全く人目に触れない女になつてしまおう、誰が勧めても頼んでも店の薄暗い物蔭以外には一步も出まいと決めていた。そうでなくても、兄は東京に学んでゐる。妹は京都に学んでゐる。弟はまだ土地の中学にゐる。店を初め一家の締め括^{くく}りのために自分はどうしても両親を助けて家にいなければならなかった。人はお嫁^{いっ}に行つてから家政に苦勞するの^に、自分は反対に小娘の時から舅^{しゅうとしゅうとめ}姑^{うとめ}のような父母に仕えてあらゆる氣苦勞と勞働をしてゐた。そんな境遇にいたので異性と恋をするというような考も機会も全くなかつた。従つて貞操を汚すような男の誘惑というものも一切知らなかつた。

それからこれは何時かの『早稲田文学』へ載せた雑感の中にもちよつと書いた事であるが、自分は幼い時から動もすると死の不安に襲われて平生少しの病気もない健かな身体でありながらかえつて若死をする気がしてならなかった。それがため他人の嫁入沙汰を聞いても他人は他人、自分は自分の運命があるという風に思つて、結婚などをする自分ではないと堅く信じていた。『源氏物語』のような文学書を読んで作中の恋には自分の事のやうに喜憂することがあつても、それは夢の世界、空想の世界に遊んでいる自分に過ぎなかった。

また十七、八歳から後は露西亞のトルストイの翻訳物などを讀んで、結婚は罪惡である、人種を絶やして無に歸するのが人間の理想だというような迷信がかなり久しい間自分を囚えていたので、自分は固より、偶ま逢う同じ街の友人にも非結婚主義を熱心に勧めたりなんかした。そういうような事に由つても自分は男子の誘惑から隔った遠い彼方に住んでいた。

親戚の者から縁談を勧める事もあつたが、自分が汚らわしいという風に眉を顰めるので、自分の前でそんな話を持出す人も後には全くなくなった。親たちも家になくてならぬ娘であるから、自分が結婚を望む氣振もないのを善い事にして格別勧めようとしなかった。

そうして自分は出来るだけ従順に働いて、忙しい家業に心を尽していた。空想の別世界にも住んでいるが、現実の常識生活にも一点の批を打たれないようにしようというのが自分のその頃の瘦我慢であった。父が株券などに手を出して一時は危くなつた家産を旧通りに挽回することの出来たのも、大抵自分が十代から二十歳の初へかけての気苦勞の結果であつた。そういう一家の危機を外に学んでいる兄や妹に今日が日までも一切知らせずに済すことが出来たのであつた。

自分の処女時代は右のようにして終つた。思いも寄らぬ偶然な事から一人の男と相知るに到つて自分の性情は不思議なほど激変した。自分は初めて現実的な恋愛の感情が我身を焦すのを覚えた。その男と終に結婚した。自分の齡は二十四であつた。

恋をし結婚をして以後の自分の觀る世界は処女の時に比べて非常に潤い快活なものとなつた。娘の頃の自分の心持には僻んだり、偏したり、暗かったりした事の多かつたのに気が附いた。結婚をせねば領解の出来ない事柄の多いことも知つた。

それから今日まで妻として貞操に何の欠けた所もない生活が続けて来ているのは自分ら夫婦にとつて東から日が昇るのと齊しく当然の事としている。一夫一婦主義を意識して実行しているのでも、『女大学』に教えてあるような旧道德に压抑せられているのでも

ない。つまり初めの恋愛状態が益々根を張り枝を伸して発達して行くのに過ぎない。良人と自分とは天分も教育も性情も異^{ちが}つてゐる。それでいろいろの彩料を交ぜながら何^{どこ}処かに引^{ひき}緊^{しま}つて調和が取れている絵のように二人の心持がしつくりと合っている所に、自分の感情は歓喜と幸福とを得ているらしい。勿論、不足と不安とは自分らの生活の上に絶間もないが、その不足と不安の生活を共にしているという事が、自分らの歓喜でも幸福でもある。動搖の乏しい単調な生活であつたなら自分らはあるいは早く倦^あいてしまつていたかも知れない。

同じ芸術に従事して生活の思想にも形式にも類似の多いという事が二人の心の平^{へい}衡^{こう}を保つて行かれる一つの原因であろう。また子供に対する愛情を斉しくしていることも一つの原因であろう。また良人を師として常に教えられ、親友以上の親友として、不安動搖の生の中に信賴し扶^{たす}け合つて行く情味も一つの原因であろう。

しかし何が自分の貞操を自然に守らせている原因の重^{おも}なものかと考えて来ると、処女時代から失わずにいる「純潔」を貴ぶ性情がそれである。良人と自分との間には心の上に虚偽がない。何事も隠さずに打明けねば自分の純潔を好む心が済まない。従つて肉体をも純潔に自重したい。不貞なる行為はやがて不潔である。虚偽である。純潔な肉体は、自分の

純潔な心の最も大切な象徴として堅く保持したいと思うのである。

翻って処女時代を顧みてもそうである。自分はよほど特殊な境遇に育ち、特殊な性情を持つて処女時代の貞操を正しく過ごして来たが、前に挙げた多くの理由には僻^{ひが}んだり間違ったりした心持から出たものも交っている。その中で今日から考えても最も正しい理由はやはり「純潔」を貴ぶ性情であつた。

自分には今日まで貞操を破るような行為を望む内心の要求は少しもなく、今後もしやう危惧^{きぐ}は夢にも思いがけないが、万一そういう不貞な心が起るとしても、それを予防するものはこの「純潔」を貴び、正しきを欲する性情の威力であると信じている。寧^{ただ}に貞操についてのみならず個人の尊厳はこの性情を土台として保たれかつ發揮せられるものだと思じている。

このように意識して自分の貞操の地盤を反省し出した自分は「純潔」を貴ぶ性情を主とした上になお下のような理由を新たに加えたい。それはもし貞操を乱した場合を予想した消極的理由ではあるが、今日の自分はこのいう事をも考えて見ずにはいられない。即ち処女時代において不貞の行為があれば、処女の純潔は破壊せられたのである。その女は自ら恥^くと悔^くとを覚えるばかりでなく、淑女たる資格なき者として社会から擯^{ひん}斥^{せき}せられても

涙を呑んで忍ぶより外はない。進んで貞淑な人の妻となる資格に欠けた所のあるのは勿論である。かような将来の不幸を予知する明敏な心がある以上、処女自身にあくまでも自己の貞操を尊重するのが賢い仕方である。

妻にして貞操を破るとすれば忽ち家庭の不和を生ぜずには已むまい。子女の教育についても母が正義の規範を示す資格を欠くことになる。教えられざる女は知らぬこと、理智の眼の開いた婦人はこれがためにも貞操を尊重せねばならぬ。家庭の平和と純潔とを乱せば一身の破滅ばかりでなく、延いては一家の協同生活を危くし、社会の幸福をも害う結果が予想せられる。

学者は種の保存の上からも女子の貞操は太切であるという。学説としてはそうでもあろうが、自分にはまだ夫婦の血族を保存するために貞操を守ろうとする自覚はない。それよりも自分のように純潔を貴ぶ性情を基礎としてさえいれば自然に種の保存の意義にも一致する結果になると思う。

以上は専ら自分にのみついて述べた。これを自分だけの経験から出発した特殊の貞操観であつて、一般の婦人たちに及ぼしがいものである事は勿論知っている。世の中の婦人の大多数は貞操の堅固な人たちである。自分はその一人一人の特殊な貞操観を聞きたい。

また再婚をする婦人の心持、良人を定めずして多数の異性に接する稼業かぎようの女の心持などは、どういう所に心の平衡を取つて自己を安んじ羞恥しゆうちを抑おさえていることが出来るのか、それらについても経験を知りたい。

未亡人というものは故人某なにがしの妻である。それが再嫁をするということは法律上に姦通ではないにしても、本人の心持は疚やましくないものであろうか。未亡人の貞操観というものは赤裸裸に語る人があつて欲しい。

また男子の貞操観をも聞きたいものであるが、それは男子自身の正直な告白を待つより外はない。しかし自分の想像では、男子は生理的に女子とよほど異ちがつた所があつて、処女には性欲の自発がないにかかわらず、若い男子にはそれが反対に熾さかんであるらしい。(十月の雑誌『三田文学』みたぶんがくの谷崎氏の小説はその一例である。)また婦人は早く老いやすいにかかわらず、男子は七十歳の老人にも好色の噂うわさを聞く例ためしが多い。特殊な男子を除き、一般大衆の男子がそうであるなら、男子の貞操はよほど趣を異にせねばならぬはずである。男子は貞操を守るに堪えないともいわれよう。

それとも、将来は教養ある男子が殖えるに従つて、自己の純潔を貴ぶため、家庭の平和を欲するため、放縦ほうしゆうな性欲を自制して一夫一婦主義を女子と同じく尊重し実践するよ

うになるであらうか。また反対に女子もまた刺激に慄^{あこが}れる心や食物その他の変革から従来の体質を漸次一変して性交の欲望を自発し、併^{あわ}せて男子と斉しく老ゆることも遅くなるであらうか。最後に述べて置く、自分の貞操は男子——良人の貞操の如何^{いかん}に由つて動揺するものでない。自分の肉体を清らかに保つのは自分の心の象徴だとして、何よりも先ず自分のために尊重するのである。そうしてこれは誇るべき事でも何でもない、自分に取つて当然の事だと思っている。

（『女子文壇』一九一一年一〇——十一月）

青空文庫情報

底本：「与謝野晶子評論集」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年8月16日初版発行

1994（平成6年）年6月6日10刷発行

底本の親本：「雑記帳」金尾文淵堂

1915（大正4）年5月初版発行

初出：「女子文壇」

1911（明治44）年10月～11月

入力：Nana ohbe

校正：門田裕志

2002年1月10日公開

2012年9月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私の貞操観

与謝野晶子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>